様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 １４ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ２１２６１

研究課題名（和文）17世紀から19世紀における東アジア言語政策の研究

研究課題名（英文）A study on the language policy in East Asia from 17 century to 19 century

研究代表者
荒木　典子（ARAKI, Noriko）

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：４０５９６９８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：中国清朝初期（康熙年間ぐらいまで）の満洲族における漢語理解および漢文化の受容の様相を明らかにすべく、漢語文芸作品の満洲語訳に焦点を当て、満漢翻訳の技能や方針の検討、テキストクリティークの作業を行った。文芸作品の満洲語訳については、早田輝洋氏による『満文金瓶梅』の全面的な研究を除いては、その数が多かったことが指摘されている以外、あまり積極的に検討されてきたとは言えない。本研究では、『金瓶梅』については、複数の翻訳者が共同作業を行っていた可能性を指摘し、底本特定に近づくための新たな証拠を提出した。『西廂記』については複数ある版本の整理と書誌の報告、関連作品の特徴を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
満洲語に翻訳された漢語文芸作品について、これまではその数の多さを指摘する研究はあったものの、特定の作品について版本研究まで踏み込んだものは、早田輝洋氏、寺村政男氏の論考を除いて多くはなかった。本研究の過程において、『満文西廂記』にも様々な版本や関連作品が存在することが明らかになり、清朝における漢語文芸作品の流通と受容に関する研究に新しい道筋をつけることができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to clarify the aspect of Chinese language understanding and acceptance of Chinese culture in the Manchu race in the early Qing dynasty (up to around the Kangxi years). Focusing on the Manchu translation of Chinese literary works, we examined Manchu translation skills and policies, and carried out text criticism. There are relatively few papers on the Manchu language translations of literary works, except for the complete study of Manwen Jin ping mei by Teruhiro Hayata. This project mainly investigated two literary works: Manwen Jin ping mei and Manhan Xi xiang ji. Regarding Manwen Jin ping mei, we pointed out the possibility that multiple translators were collaborating, and submitted new evidence to approach the identification of the original edition. For Manhan Xi xiang ji, which has a large number of editions, we analyzed the characteristics of each edition and its relationship. We also reported its derivative works.

研究分野：中国語文法・語彙史

キーワード：満文金瓶梅　満漢西廂記　版本　満漢翻訳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

17 世紀から 19 世紀までの東アジアでの主たる言語政策、つまりこの期間、中国大陸を統治していた清による言語政策を研究する。政治と言語政策の関連は歴史上どこの国や地域でも見られるものであるが、清朝の場合は他に類を見ない二面性の政策を取っていたこと、努力の甲斐なく被征服層の言語に同化してしまったことが特徴的である。この満洲族の漢化は何時どのような過程で傾斜していったかは、学界でもまだなぞのままである。1644 年に中国本土に侵入して以来、満洲族は清朝として 270 年間この地に君臨し続けた。満洲族は複数の異民族を統治することになったが、最も数が多かったのは言うまでもなく漢族である。漢族を従えるために清朝は二面性の政策を強いられることになる。一つは、満漢を差別せず漢文化を尊重する政策、もう一つは満洲族の支配的地位を維持しようとする政策である。この矛盾した二つの政策を両立させるために様々な工夫が凝らされた。特に後者について述べると、漢族に対しては満洲族の服装や思想を強制した。また、民族主義を鼓吹するために、満洲語の普及、保存に努めた。本土侵入前に既に作成されていた満洲文字を改良して使いやすいものにしたり、漢人に満洲語を習得させたり、満洲語の辞書を編纂したりしたのである。その努力にも関わらず漢文化への同化は止めようがなく、嘉慶年間と道光年間を境に満洲語の使用は顕著に減少する。このことは地方と中央との往復書簡が満洲語のみの段階、満漢併記の段階、漢語のみの段階を経ていることから知られる。乾隆年間以来何度も版を重ねた『一百条』系テキストや『庸言知旨』 、『清文啓蒙』には民族言語たる満洲語を学びなおすことを目的として編纂された旨が序文に明記されている。このような事態に至るプロセスを探るためのヒントとなるのが漢語から満洲語への繙訳文献や辞書類である。趙志忠 2002:99-104 によると文学作品は 151 種が繙訳されているという。そこにリストアップされているいくつかに目を通してみると、当初は馴染みのなかった漢語・ 漢文化へのとまどいが垣間見られる。例えば明代白話小説『金瓶梅』の満文訳（『満文金瓶梅』康熙 47＝1708 年の序を持つ）は、言葉遊びを中心とした語彙が単なる直訳であったり、或いは解釈が間違ったりしているために面白味が失われている場合がある。戯曲『西廂記』の満文訳にも訳しきれていない近世漢語語彙が見られる（寺村政男 2008:204）。清朝初期から中期の満漢対訳辞書からは漢語習得中の様子がうかがえる。『成語對待』には、満洲文字で漢字音が付されたテキストが存在する。付けられた漢字音から康熙の末年～雍正年間のものと推察される（寺村 2008:298）。つまり、この時期の満洲族にとって漢字には「振り仮名」が必要だったということがわかる。明代の字書『玉堂字彙』に満洲語で漢字音と字義が付されたのも康熙年間と見られる（寺村 2013:6）。満洲語能力喪失の段階も文献によってたどれる可能性がある。子弟書の形式が良い例である。子弟書は、乾隆年間に始まり民国初までの間中国北方に流行した説唱文芸の一つで、八旗の子弟が演者となったのでこの名がある（崔蘊華 2005:7）。「尋夫曲 子弟書」は満漢合璧、「螃蟹段児子弟書」は満漢混用でかつ、満洲語の横には漢語訳が添え書きされており、「査関子弟書」は全文漢文でところどころに差し挟まれる満洲語も漢字で書かれている（寺村 2008）。このように、満洲語の忘却と一口に言っても漢語の補助があれば満洲語が読めた段階文字まで忘れてしまった段階があることがわかる。小説でも、道光 28(1848)年の序を持つ『満文聊斎志異』は全文満漢併記してある。

２．研究の目的

17 世紀から 19 世紀までの清朝による言語政策の実態を文献に基づいて研究する。清朝は他に類を見ない二面性の言語政策―一つは満漢を差別せず漢文化を尊重する政策、もう一つは満洲族の支配的地位を維持しようとする政策―を取っていたこと、努力の甲斐なく被征服層の言語に同化 してしまったことが特徴的である。この同化、つまり漢化がいつ、どのような過程で進行していったのかは学界でもまだ謎のままであり解明されていない大きな問題である。このような歴史的経緯を踏まえ、主に文芸作品の漢―満繙訳、辞書や文法書を書誌学的、言語学的、文学的な立場から調査し、満洲族が漢語とどのように向き合い、同化していったのかを明らかにする。

３．研究の方法

漢語文芸作品の満洲語訳の調査を中心に進めていく。満洲族の漢語理解については、『満文金瓶梅』、『満文西廂記』を始めとする文芸作品の原文と満文訳の訳出状況を調査し、誤訳及びうまく訳せている場合の傾向を明らかにする。所々見られる漢語併記について、併記される語彙、対応する満洲語のパターンをきめ細かく分析し、漢語語彙の取り入れ方について検討する。同時に、従来あまり注目されてこなかった版本の問題も掘り下げる。『満文西廂記』は、康熙 49 年序刊本、それに基づく写本が知られているが、そのほかの版本を発見し、書誌を整理する。

４．研究成果

本研究で得られた成果は以下の通りである。

(1)『満文金瓶梅』について、翻訳底本に関する争点を整理し、自ら底本の特定を試みた。既に早田輝洋 1998:4-5 により、詞話本や張竹坡本ではないということまでは絞り込まれており、崇禎年間に刊行されたとされる版本（崇禎本）のいずれかであろうことは予想ができていた。崇禎本はさらに二つの系統に分かれる。二つの系統と満文本を主に形式の面で対照し、このうち東京

大学東洋文化研究所蔵本である可能性を排除するに至った。
(2)『満文金瓶梅』を通観した場合に見られる人名の傍訳の不統一性に注目し、翻訳者が複数いた可能性、翻訳者が交替と思われる「切れ目」を指摘した。
(3)『金瓶梅詞話』における特殊語彙“雌”の扱いが、崇禎本、満文本という改訂の過程で変化していくか否かを調べた。ほとんどの用例が削除されることなく保存され、満文本でもうまく訳していることが分かった。
(4)『満漢西廂記』について、国内外で閲覧できる版本を可能な限り調査した。その結果、
①康熙 49 年刊本にも複数の種類がある。
②その抄本にも複数ある。中には刻本の誤字まで受け継いでいるものもある。
③以上のいずれとも系統の違うと思われる『有圖満漢西廂記』を武蔵大学で発見し、書誌の分析、ほかの版本との比較を行った。内部の錯簡の傾向から、もともとはより小さな版木で印刷された、先行するテキストが存在する可能性を指摘した。
④京都大学蔵本『満漢並香集』を調査し、『西廂記』をもとに作成した銭書・作、遊戯八股文『雅趣蔵書西廂時芸』に尚玉章なる人物が満文訳を付したものであることを明らかにした。
⑤イギリス・大英図書館にて満文のみの版本、Tuwancihiyame dasaha si siyang gi bithe を閲覧し、ほかの版本との満文訳の違いを指摘した。

＜引用文献＞
・日本語
寺村政男 2008『東アジアにおける言語接触の研究』竹林舎
寺村政男 2013『満洲語注音・注釈『玉堂字彙』子集―研究と翻刻・繙訳―』水門の会特刊叢書
早田輝洋 1998『満文金瓶梅訳注　序-第十回』第一書房
・中国語
崔薀華 2005『書斎与書坊之間―清代子弟書研究』北京大学出版社
趙志忠 2002『清代満語文学史略』遼寧民族出版社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 寺村政男、荒木典子、鋤田智彦	４．巻 28
２．論文標題 『満漢合璧西廂記』の総合的研究・その7」	５．発行年 2018年
３．雑誌名 水門　言葉と歴史	６．最初と最後の頁 1-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒木典子	４．巻 60
２．論文標題 武蔵大学蔵《有圖満漢西廂記》について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国語研究	６．最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒木典子	４．巻 -
２．論文標題 『金瓶梅』の改訂、改訳における特殊語彙の処理――“雌牙”、“雌飯”、“雌漢子”を例として――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 水門の会特刊叢書　言語の研究	６．最初と最後の頁 20-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 荒木典子	４．巻 44
２．論文標題 『満漢西廂記』版本二種の漢文部分の相違について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 中国文学研究	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木典子	4．巻 515-12
2．論文標題 『満漢並香集』訳注（二）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 人文学報	6．最初と最後の頁 21-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木典子	4．巻 514-12
2．論文標題 『満漢並香集』訳注（一）	5．発行年 2018年
3．雑誌名 人文学報	6．最初と最後の頁 21-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木典子	4．巻 3
2．論文標題 『満文金瓶梅』に見られる清朝初期の満漢言語接触	5．発行年 2017年
3．雑誌名 アジアの未来へ―私の提案	6．最初と最後の頁 41-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺村政男、荒木典子、鋤田智彦	4．巻 27
2．論文標題 『満漢合璧西廂記』の総合的研究・その6	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『水門　言葉と歴史』	6．最初と最後の頁 1-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 荒木典子	4．巻 27
2．論文標題 「康熙47年刊『満文金瓶梅』底本特定の試み」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『水門　言葉と歴史』	6．最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 寺村政男、荒木典子、鋤田智彦	4．巻 29
2．論文標題 『満漢合璧西廂記』の総合的な研究・その８	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『水門　言葉と歴史』	6．最初と最後の頁 54-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 荒木典子
2．発表標題 武蔵大学蔵《有圖満漢西廂記》について
3．学会等名 中国近世語学会2018年度研究総会
4．発表年 2018年

1．発表者名 荒木典子
2．発表標題 『満漢西廂記』諸本について
3．学会等名 第3回清代言語接触研究会
4．発表年 2018年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 『満文金瓶梅』の語彙について――“ 雌 ”の特殊用法に対する処理
３．学会等名 漢日語言文化対比與翻訳研究合同研究会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 『満漢西廂記』関連作品について
３．学会等名 第4回清代言語接触研究会
４．発表年 2018年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 『満漢西廂記』の版本研究
３．学会等名 水門の会・東京例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 『満文金瓶梅』漢語傍訳からわかること
３．学会等名 第２回清代言語接触研究会
４．発表年 2017年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 関於『満文金瓶梅』成立的問題―以満文与漢文人名的対等関係為線策―（二）
３．学会等名 第十五届国際城市語言学会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 『満文金瓶梅』の漢語語彙について
３．学会等名 水門の会東京例会
４．発表年 2018年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 「『満文金瓶梅』を手掛かりとした満漢言語接触の研究」
３．学会等名 第１回清代言語接触研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 「『満文金瓶梅』に見られる清朝初期の満漢言語接触」
３．学会等名 第３回アジア未来会議（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 「『満文金瓶梅』に見える漢語傍訳について」
３．学会等名 日本中国語学会第66回全国大会（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 「関于《満文金瓶梅》成立的問題—以満文与漢語詞彙的対応関係為線索」
３．学会等名 中古近代漢語工作坊（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 荒木典子
２．発表標題 ＜武蔵大学図書館蔵《有圖満漢西廂記》的幾個特征＞
３．学会等名 第17回国際都市語言学会（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考